

かわ

Vol.220

2014.1.1

CONTENTS

会長年頭のご挨拶 ①

福岡県河川協会会長 平井一三

河川事業現地研修会報告 ②～④

岡山県

わがまちの川 ⑤～⑥

第18回 大川市（筑後川・花京川）

九州地方治水大会 ⑦～⑧

長崎ブリックホール

ふくおかの身近な川と魚を知ろう... ⑨～⑩

第25回 ドジョウは田んぼの魚？

会長年頭のご挨拶



新年あけまして
おめでとうございます。

福岡県河川協会会長

平井 一三

Kazumi Hirai



平成26年の新しい年を迎え、謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

昨年は、東京が56年ぶり2回目の夏期オリンピック・パラリンピックの開催都市に決定し、日本中がよろこびを共有しました。

九州では、九州新幹線の全線開通により、人々の流れが大きく変わってきたなか、豪華寝台列車「ななつ星 in 九州」の運行が始まり、日本国内及び海外からより多くの観光客が訪れ、ますます九州が発展していくことを期待しております。

このような中、昨年も全国各地で大きな水害や土砂災害が発生しました。

幸いなことに、本県では大きな被害はありませんでしたが、7月には、山口県や島根県で記録的な大雨により、山口県山口市、萩市、島根県津和野町等で浸水被害が発生し、8月にも、秋田県、岩手県を中心に記録的大雨となり、河川の増水や土砂災害が発生しました。

また、例年を上回る台風が発生し、9月の台風18号では、紅葉の名所である京都嵐山の桂川が氾濫し、渡月橋付近が浸水するなど、京都府、滋賀県、福井県に、8月より運用が始まったばかりの特別警報が発表される大雨となりました。さらに、10月には、台風26号の豪雨により、東京都伊豆大島では土石流による甚大な被害が発生しました。

これらの災害により、多くの尊い生命や貴重な財産が奪われ、誠に遺憾に堪えません。被災された方々には、心からお見舞い申し上げます。

県においては、県民の方々の人命と財産を守るため、浸水対策や避難に役立つ情報提供、地域住民の方々への日常からの防災意識の啓発なども実施されております。

協会としましても、治水、利水の総合的な事業を推進し、災害に強い安心して暮らせる福岡県を築いていくために、関係者皆様のご支援を賜りながら尽力して参ります。

本年が、皆様のご多幸となお一層の飛躍の年となることを祈念いたしまして、新年のご挨拶といたします。

河川事業現地研修会報告

平成25年11月14日(木)～11月15日(金) 於 岡山県美作局勝英地域事務所
国土交通省中国地方整備局岡山河川事務所

平成25年度河川改修事業等県外視察研修が、平成25年11月14日(木)～平成25年11月15日(金)の二日間、多くの参加者を得て岡山県で実施されました。又、この研修を機会に県職員や市町村職員との意見交換等を通じて、交流を深めることができました。

〈一日目〉岡山県美作局勝英地域事務所 吉野川河川災害復旧等関連緊急事業 山家川河川災害復旧助成事業
〈二日目〉国土交通省中国地方整備局 岡山河川事務所百間川出張所 百間川河口水門増築事業

平成25年度 河川事業現地研修会に参加して

福岡県県土整備部河川課 主任技師 わざき ともゆき 和崎智行

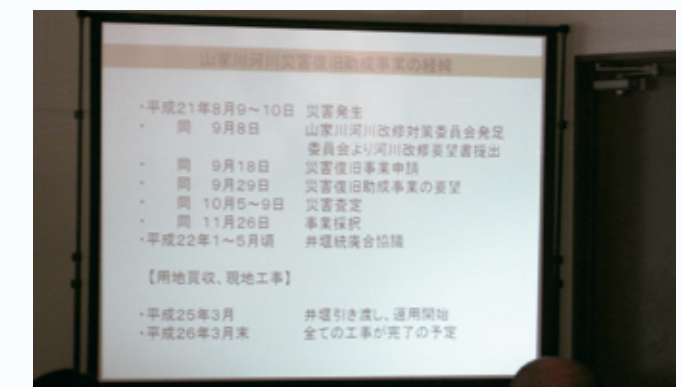


勝英地域事務所でのあいさつ

岡山県は「晴れの国」。既にご存じの方もいるかと思いますが、単純に言うと晴れの日数が全国で最も多いからだそうです。(岡山市は年間降水量1mm未満の日数が約277日と全国平均よりも29日も多いとのこと。)
「晴れの国」なら水不足には悩んでも、水害に苦しむことはないだろうと思っていましたが、岡山県での水害被害額は全国で第7位(平成15年～22年水害統計より)と意外に上位に入っているということに驚きました。(ちなみに福岡県は第8位)岡山平野は洪水による土砂堆積によりできた平地と、前面の浅い海を干拓・埋め立てた土地となっており、その中に岡山市・倉敷市といった主要都市が集中しているため、河川が氾濫した時に大きな被害になるようです。またこのような気候と地形との関係で水不足が起こる事もやはり悩みの一つとの事です。このたびはそのような水事情のある岡山県の河川事業について、国土交通省中国地方整備局岡山河川事務所及び岡山県美作局県民局勝英地域事務所の方々のご協力をいただき、ご紹介をしていただきましたので報告いたします。

1日目、県東、兵庫県に隣接する美作市で、

平成21年8月の台風9号に伴う豪雨被害を受けて事業化した、一級河川吉井川水系の山家川河川災害助成事業(助成事業)と吉野川災害復旧等関連緊急事業(復緊事業)について紹介していただきました。山間部に局地的な集中豪雨があり、あっという間に河川が氾濫したそうです。当時の被災写真も見せていただきましたが、被害が甚大であったのがうかがえました。山家川助成事業は計画流量(1/30確率)を対象とし、家屋浸水被害を防止する目的で事業化。上流部を山家川が流れ吉野川と合流するため、助成事業による流量増加を踏まえ、流下能力の低い地区に対し家屋浸水被害を防止する目的で事業化しているとの事です。驚いたのは山家川で事業区間(L=6.2km)内に15箇所もあった固定堰を、いずれも可動堰(ラバー堰)にし、8箇所に統合したとのことでした。河川内の固定堰は時に災害を招く要因にもなります。その数が減り、可動堰になるということは、河川にとっては、ずいぶんストレスが減ったことでしょう。しかしこれを行なうには、関係機関との協議調整を綿密に行ない、改修計画をたてる必要もあるた



山家川概要説明



吉野川河川災害復旧等関連緊急事業現場

め、大変なご苦勞をなさったことだと思います。改修してからの苦勞話も力説していただきました。当然の事ですが、維持管理を任せるからには維持管理し易い施設を作る事が大事なのだと改めて思いました。今年度には事業が完了する見込みがたっているようで、被災を受けた地域の方々も安心される事だと思います。福岡県では平成24年の九州北部豪雨による災害復旧が現在進行中です。いち早く事業の完了を図る努力をしないといけないなと気持ちが引き締まりました。余談ですが少しだけ美作市の宣伝です。湯郷温泉、武蔵の里、湯郷BELLE（女子サッカーチームで日本代表の選手もいます）の試合観戦など、楽しめるスポットなどがたくさんあるところなので是非、お立ち寄りくださいとの事です。



山家川河川災害復旧助成事業現場説明

2日目、岡山市を流れる旭川の放水路として江戸時代に整備された百間川の河口水門の増築現場を紹介していただきました。既存の河口水門だけでは計画流量の約6割しか排水能力がないため、増築を行ない放水路としての機能を最大限に発揮させるのが事業の趣旨となっています。ここではとても新しい形の水門を見ることができました。ライジングセクターゲートといい、シェル構造の扉体の両端が円盤となっており、円盤を回転させて扉体を開閉する形式に

なっています。国内では現在6施設が完成しているとのこと。この構造は従来の昇降式のスライドゲートに比べると、構造物の高さが低くできるため、耐震性、景観性、経済性に優れた構造なのだそうです。ゲートは特殊な形をしており、割高になるとのことですが、軟弱地盤上の施工になる本工事では重量が軽い本工法を採用する事で基礎部分の経費が削減できるため、結果として経済的な工法になっているようです。構造上、部品が少なく、維持管理が容易にできるため今後の維持管理費の削減もできるとの事でした。今年度中には完成予定とのこと。百間川は、江戸時代に岡山城の築造の際に岡山城を守るため、城を取り囲むように旭川を改修した結果、法線が悪く洪水被害が頻繁に起こってしまい、それを回避するために、バイパス工事を行なったのが百間川になります。幅が約百間（約181m）あるので百間川と呼ばれるそうです。その際に河川内に築造された越流堤が今でも残っているとの事です。しまったー！！って顔した当時の城主（もしくは設計者？）の姿が目には浮かびます。しかし単純に旭川から水を誘導した堀を作っていたら、現在の百間川はなかったかもしれません。また新鶴見橋から見える、後楽園の向こう側にそびえる岡山城を見ることがも無かったかもしれません。などなど、歴史を挟んで河川を見ると河川に親しみを持って眺められるものなのだと改めて思いました。またそこに歴史を受け継ぎ、新設される河口水門、優々と湾を眺め、雨上がりの青空にたたずむ姿はとても勇ましいものでした。

以上、研修報告となりますが、2日間を通して事業を行なう上では、維持管理を見据えた改修計画が必要であることを再認識することができました。



百間川河口水門増築事業現場

河川事業現地研修会に参加して

直方市土木課土木係 主査 みやざき ともこ 宮崎智子



勝英地域事務所での概要説明

直方市は福岡県の北部にあり、一級河川遠賀川に沿って開ける筑豊平野のほぼ中央に位置します。直方市では、遠賀川水系の準用河川や普通河川を管理しています。今回の研修で、岡山市、岡山河川事務所の事業を視察させて頂き、市管理の河川にも活かすことができればと思います。参加しました。

1日目、岡山市美作県民局勝英地域事務所にて山家川、吉野川について説明をして頂きました。平成21年8月の台風9号の影響による豪雨のため、堤防越水による氾濫が発生し、甚大な被害が発生したとの事でした。山家川は延長6,200mに渡り河川災害等災害復旧事業において、「越水させない原型復旧」により事業採択され、事業が行われていました。吉野川は延長8,000mに渡り河川災害復旧等関連緊急事業において、山家川助成事業による流量の増加を考慮した堤防高さに改良が行われていました。堤防や引堤、パラペットと色々な工法があり、工夫が感じられました。



山家川河川災害復旧助成事業現場

また、堰は15箇所を8箇所に統合しており、地元住民の協力が大きい事に感心しました。堰は、ゴム引布製起伏堰が採用されており、設置されて1年目は堰の高さの管理等に、苦慮しておられるとの事でした。説明を頂いた中で、井堰・樋門を管理している地元管理者の高齢化が進んでおり、簡単・安全な物を作るには、県や市町村が地元の方と十分に協議し、より良い物を作る事が重要なことだと痛感しました。

2日目、岡山河川事務所において、百間川河口水門増設事業について説明を頂き、現地視察をしました。国内最大のライジングセクターゲートを近くで視察させて頂き、その規模に迫力を感じました。高さは既設の引き上げ式ゲートよりも低く、堰柱の形状も景観に配慮していることが窺えました。

今回の研修では、岡山市、岡山河川事務所の事業について学ばせて頂くと共に、職員の方々から、施設管理の貴重な苦勞談をお聞かせ頂き、非常に多くの事を学びました。今後の業務に活かしていきたいと思ひます。また、福岡県や他の市町村の職員の方々との意見交換の場を頂き、大変感謝しております。



百間川河口水門増築事業現場にて

第18回 大川市

筑後川・花宗川



筑後川・花宗川と大川市



大川市は昭和29年4月1日に1町5村が合併し誕生しました。「大川」とは筑後川を指します。本市は木工業が盛んですが、地域の歴史と産業、文化は常に筑後川とその支流である花宗川とともにありました。川と大きなかわりのある大川市を紹介します。

筑後川・花宗川

筑紫次郎の異名を持ち、日本三大暴れ川の一つである筑後川の下流は有明海の潮の干満の影響を大きく受けます。干満の差は最大で約6メートルもあり、そのバックウォーターは約20キロメートル上流までさかのぼります。

花宗川は八女市の矢部川花宗堰から取水し、大川市で筑後川に合流するまで南筑後平野の田畑を潤すために江戸時代に開削された半人工の河川です。河口近くは筑後川と同じく潮の満ち引きがあり、昭和前半期までは船舶の航行がありました。

また、日田から筑後川を流されてきた杉筏の多くはこの花宗川に引き込まれ、水揚げされました。このため、以前は花宗川河口付近に製材所や木材市場が立ち並んでいました。木工業を支える原動力となった河川であり、今なお「えつ」「天然うなぎ」「博多あまおう」など豊かな恵みをもたらしています。



日田から流されてきた杉筏



「ななつ星 in 九州」の最高級客室を飾る大川組子
※写真はJB九州「デラックススイート」

筑後川昇開橋（旧国鉄佐賀線筑後川橋梁）



大川市のランドマークは何と言っても筑後川昇開橋です。

昭和10年に旧国鉄佐賀線の敷設とともに架設された東洋一の可動橋ですが、当時は筑後川の水運も盛んなころでした。明治から昭和の前期に栄えた港町若津には大型船舶が行き来したため、旧国鉄佐賀線筑後川橋梁は大型船舶の航行を可能にする必要がありました。そこで考え出されたのがこの昇開式可動橋です。全長507mの橋梁の中央の可動桁は23mの高さまで上昇し、大型船が自在に通過できます。

昭和63年に佐賀線が廃止された後は遊歩道として整備され一般に開放されており、大川市の新しい観光スポットとしても注目を浴びています。

筑後川昇開橋は国指定重要文化財であるとともに、平成19年、日本機械学会から機械技術発展史上重要な成果を示すものとして、東海道新幹線0系電動客車、旅客機YS11、カブ号本田自動車補助エンジンなどとともに「機械遺産」に認定されました。

若津港と導流堤（デ・レーケ堤）

若津港は、今から260余年前の江戸時代、宝暦年間に久留米藩によって開かれ、筑後地方の海の玄関口として背後の広大な穀倉地帯の米や麦、日田地方の木材の積出港として大いに繁栄してきました。

しかし、若津港のある有明海の潮の干満の影響を受ける筑後川下流は泥土の堆積がひどく、特に明治以降は船舶も大型化したため、泥土の堆積は船舶航行の支障となってきました。

そこで明治政府の内務省はオランダ人技師デ・レーケを招き、筑後川を調査させ、導流堤を築きました。筑後川の中心部分に全長約6kmにわたって石垣が築かれており、川の流れを一定方向に導くことにより川底に泥土が堆積することを防ぎ、船舶の安全な航行を助けています。完成から100年以上経ちますが、現在もその役割を果たしています。



導流堤



日本でここだけ “えつ”

えつは有明海にだけ生息し、産卵のため筑後川にのぼるカタクチイワシ科の魚です。あっさりとしており、刺身はもちろん塩焼き、煮付け、唐揚げ、南蛮付け、姿寿司など料理は多彩です。鮮度が落ちるのが早いので地元でしか味わえません。5月から7月の漁解禁に合わせ、屋形船で取れたてを食する「えつ狩り船」が登場します。川船で新鮮なえつ料理に舌鼓を打ちながらの船遊びは大川の夏の風物詩として好評です。ぜひ、初夏の逸品をお楽しみください。

明治の洋館 三瀧銀行記念館

若津港の近くには明治時代に建設された洋風建築物があります。当時の栄華を偲ぶものとして必見です。

三潯銀行記念館は明治42年に三潯銀行の本店として建築されました。この建築物は煉瓦造りで、外壁は石造りを模したモルタル塗で、腰壁には徳山産御影石が積まれています。屋根は天然スレート（石板）魚鱗葺きです。各部屋の内装にはケヤキ材を贅沢に用いています。

隣接して九州貨幣博物館も一般公開されています。ぜひお立ち寄りください。



三瀦銀行記念館

九州地方治水大会(長崎大会)

日時／平成25年10月29日(火) 13:30~17:00

場所／長崎ブリックホール国際会議場

主催／長崎県、全国治水期成同盟会連合会、長崎県治水砂防・防災協会



平成25年10月29日(火) 長崎ブリックホール国際会議場において、人命と財産を守る治水事業を計画的かつ着実にを行うことが住民生活の安全と地域の発展に寄与するものであることを、広く世論に喚起することを目的に平成25年度の九州地方治水大会(長崎大会)が開催されました。

大会には長崎県選出の国会議員、長崎県会議員及び九州各県の治水事業関係者(県・市町村・河川協会等の職員)が集まり、国会や

政府並びに関係当局に対し、治水事業の強力な推進、災害発生時の速やかな対応と多様な治水対策の措置などを提言し、決議されました。

大会でまとめた決議は、後日、国会や政府並びに関係当局等に要望決議として提出されました。



大会前には記念講演として「地球温暖化の影響と今後の治水事業のあり方について」と題し、近年、地球温暖化の影響を受けて「経験したことのない大雨」が日本各地において頻発しているため、このような影響に配慮した治水事業のあり方を過去の事例をまじえて、長崎大学大学院の教授による講演がありました。



平成25年度九州地方治水大会決議(抜粋)

- 近年、自然災害が激化する一方で、治水事業費はピーク時のおよそ半分となっている状況である。災害を未然に防止し、安全で安心な国民生活の確保を図るため、事前防災・減災対策を含む治水対策に充てる財源を確保し、治水事業費の増額を図ること。
- 全国的に大規模水害が頻発している現状に鑑み、被災施設の復旧にとどまらず、再度の被災防止のための改良を十分にできるよう、災害関連復旧予算等での対応の拡充を図ること。
- 九州地方の現状を踏まえ、安全で安心できる国土を形成し、潤いとやすらぎのある水辺空間を創出するとともに、活力ある地域づくりに資するため、特に次の事項を強力に推進すること。
 - (1) 災害を予防し、地域社会の安全・安心を確保するための対策として、堤防やダム等の計画的な整備促進、水資源の乏しい山間部、離島等における治水対策を併せた生活貯水池の整備促進
 - (2) 近年頻発する水害、土砂災害に対する災害復旧関連事業の着実な推進
 - (3) 火山活動や地震に対する安全確保のための防災

事業の推進

- (4) 堤防・護岸、水門・樋門、ダム等の既存施設の機能を確実に発揮できる適切な維持管理や、老朽化した施設の計画的な補修・更新の推進
- (5) 市町村が迅速かつ的確な水防活動や事前準備を実施できるよう、洪水ハザードマップの整備や避難体制構築のための情報提供の充実等を推進するとともに、土地利用を視野に入れた流域一体となった治水事業の推進
- (6) 潤いとやすらぎのある水辺空間の創出に資するための施策の推進
- (7) 被災地の被害防止拡大や復旧、復興の早期実現のため、資材配備や技術支援等、国による広域支援体制の早急な確立
- (8) 治水事業の重要性、緊急性と地方自治体の財政の現状に鑑み、地方への財政措置に対する特段の配慮

以上、決議する。

平成25年10月29日

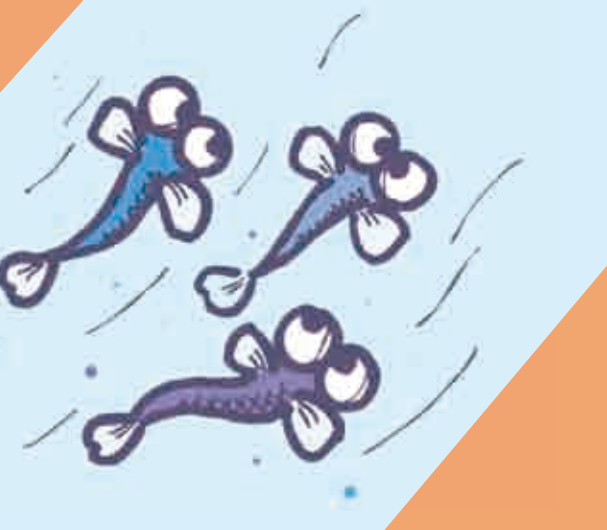
九州地方治水大会

大会では、「治水事業に関する最近の課題」と題し、国土交通省治水課長山田邦博氏、「長崎県の河川に生息する生きものたち」と題し、長崎大学大学院助教鈴木誠二氏の講義がありました。

次に、「沖縄県の河川事業について」と題し、沖縄県土木建築部河川課開発班の金城寧氏、「自主防災組織の結成と活性化を目指して「地域防災マップづくりの推進」について」と題し、長崎県長崎市防災危機管理室の岡本和幸氏による意見発表が行われました。



鬼倉徳雄 ふくおかの身近な 川とさかなを 知ろう!! No.25



ドジョウは田んぼの魚？

淡水魚の愛好家や魚類・河川の研究者の間でバイブル的存在、山と溪谷社の「改訂日本の淡水魚」は、現在、古本としてしか取り扱われておらず、しかも、定価の10倍くらいの価格上昇が起こっているとか…。その淡水魚のカラー図鑑の中には、ドジョウの産卵シーンの写真が掲載されています。水田が浅い湿地かで、オスとメスが巻きつきながら産卵を行うシーンです。それを見ると、ドジョウは田んぼの魚であることが想像されます。



ところが、九州大学大学院アクアフィールド科学研究室が過去10年近く収集した淡水魚類の分布データから、ドジョウの分布場所を抜き出すと、先の想像とは少々異なる現象が見えてきます。典型的な水田性魚類かと思いきや、ドジョウは川での出現頻度の方が高かった！ドジョウは水田の魚なのか、それとも川の魚なのか？ちなみに、ドジョウの類似種で、河川の流水域に生息するのは、シマシマ模様が美しいヤマトシマドジョウです（Vol.205で紹介済み）。いろいろな学術的知見

や古い記録を見る限り、ドジョウの好きな環境は止水的で泥の溜まった場所です。もしかして、九大の魚類データの誤り？あるいは、漁獲方法に問題があったとか？ちなみに、このドジョウの分布データの蓄積に大いに貢献しているのは私自身で、川でも水路でもドジョウを捕るのはとても得意です。だからこそ、九州北部のドジョウの置かれる現状が見えてくるのかもしれない。

私の調査の中で、ドジョウがしばしば出現する農業用水路と周囲の田んぼの様子をお見せします。ひとつは上の田から下の田へと水が流れるような田越しの仕組み、そして、水路と田んぼの間を障壁なく移動できるような仕組みが残ったような場所。ドジョウが産卵のため、水路から田んぼへと簡単に移動できるのが、写真からお分かりいただけたと思います。ちなみに、この場所の水路と田んぼの間に見られる仕組みは、残念ながら圃場整備（水田の区画整理）によって失われてしまいました。もうひとつは、冬と夏で水位が大きく異なる水路。その水路には素掘りの分水路が接続していて、そこは冬に干上がり、夏に冠水します。まるで湿地のように！この水路では、夏に冠水し、湿地のように機能する場所に移動して、ドジョウは産卵しているに違いない！前者は水田が、後者は分水路が湿地的な役割を果たし、ドジョウの産卵場所を提供しているのでしょうか。最近の農業用水路や水田にドジョウが見られないのは、水田と水路の接続が悪くなったせいで、ドジョウの川での出現頻度が高い原因の一つだろうと想像します。きっと、昔は田んぼにドジョウがたくさんいて、川よりも水路の方が出現頻度が高かったのではないのでしょうか。

さて、川ではどんな場所にドジョウが生息するのでしょうか？コンクリート護岸で固められ、水際に土（砂州）がないような場所で採集できたことはありません。たとえ、コンクリートで護岸されていても水際に砂州があり、その中に水たまりやワンドがあって、ドジョウの産卵期には冠水し、湿地のように機能する場所が必要です。農業用水路であっても、川であっても、産卵に必要な不可欠な湿地的な環境が残される場所に、ドジョウは生息できるのです。昔は水田の典型的な魚、現在の九州北部では川の魚！ドジョウが産卵できそうな湿地的機能が、水田地帯よりも川の方に多く残されていることが、九州大学の分布調査データに表れているのでしょう。

水田地帯からドジョウが姿を消している理由は他にもあります。一般的な農業用水路では、用水の利用が少ない冬場、水枯れを起こしやすい状況にあります。それは、今も昔も同じなのですが、最近の水路は3面コンクリート護岸を施しているため、底面の形状が一定であるため、水路内に水たまりができません。昔の水路は、底面の形状がで



こぼこだったので、冬場でもちょっとした水たまりが形成され、そこに多くの小魚が集まっていた。また、多くの圃場整備で行われる乾田化もドジョウにとってはマイナスです。今の田んぼ

は、畑地として利用しやすいように、水はけが良い田んぼに整備されています。昔は、冬場の湿った田んぼの中でドジョウが越冬していたそうで、最近の乾田化された田んぼにはそういった機能もありません。ドジョウの立場で考えたとき、農業生産の効率を上げるために行われた様々な施策は、彼らの生息場を失わせる悪業だったと言えるでしょう。



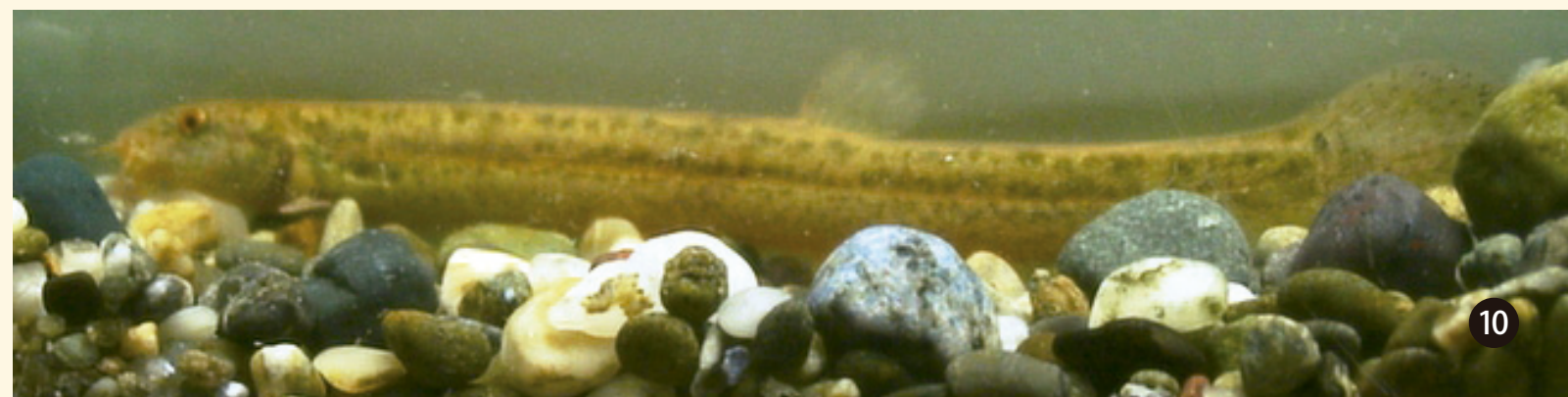
もちろん、私も人間として日本社会の中で暮らし、おいしい米を食べ、国産の麦で作ったパンを食べているわけで、日本農業を支える農家の方々に感謝する立場にあります。ただ、やはり田んぼの魚が姿を消すことに、残念さを感じるのも事実です。最近の河川行政は、治水安全度を高めるための河川工事を行う際、生物多様性を高めるための数々の工夫を行います。いわゆる多自然川づくりです。河川法という法律で、景観や生態系への配慮がしっかりと義務づけられています。農家の方々に、「あなたの田んぼの隣の水路に棲んでいるドジョウの保全と保護」をお願いするのは筋違いであって、農業生産を高める施策と並行して、田んぼの生き物を豊かにするための工夫を農村・農地の整備に義務付けるような行政施策を講じなければ、世界各国で行われている生物多様性保全の波に取り残されることでしょう。強い日本の農業を目指すと同時に、田んぼの生物多様性を如何にして保全すべきか、国レベルで検討していただきたい！

鬼倉 徳雄 (おにくらのりお)

- 九州大学大学院農学研究院・助教
- 日本魚類学会自然保護委員会・希少魚類部会委員
- 日本水環境学会九州支部・評議員

【主な著書】

- 有明海の生きものたち干潟・河口域の生物多様性（佐藤正典編）
- 干潟の海に生きる魚たち有明海の豊かさと危機（日本魚類学会自然保護委員会編）





水辺の鳥図鑑

白鶺鴒

ハクセキレイ

スズメ目セキレイ科

(学名 *Motacilla alba lugens*)

撮影者：犬鳴川流域文化研究会 中村氏
撮影地：犬鳴川流域

体長21cmほどで、ムクドリよりやや小さめで細身。他のタイリクハクセキレイ亜種より大型になる。頭から肩、背にかけてが黒色または灰色、腹部が白色だが胸部が黒くなるのが特徴的で亜種。顔は白く、黒い過眼線が入る。セグロセキレイと類似するが、本種は眼下部が白いことで判別できる。

－協会からのお知らせ－

平成25年度防災セミナー

日時／平成26年2月4日(火) 場所／発明会館ホール(東京都) 主催／公益社団法人 全国防災協会

機関誌「かわ」の閲覧及びダウンロード

河川協会ホームページから閲覧及びダウンロードができますので、ご利用いただきますようよろしくお願いいたします。

河川協会ホームページ <http://www.fukuoka-pref-kasen.jp/kasenkyokai/>

表紙の説明

遠賀川水系泉河内川

遠賀川水系泉河内川は、嘉麻市嘉穂町西部に端を発し、北方向へ流下し、桂川町を縦断した後、飯塚市(穂波町)に入るとすぐに穂波川右岸へ流入します。流域の上流部は、ほとんどが山林で、河川沿いの開けた土地に耕作地や草地が見られます。下流部の平坦な土地は、桂川町の市街地が発達しており、住宅や商業施設が多く見られる他、工場等も点在しています。



編集後記

あけまして、おめでとうございます。
平成26年が、明るい年となることを願いながら、みなさまが川を愛し、親しみを持てるように編集委員一同、本年も一生懸命編集に取り組んで参ります。
(稲益)

STAFF

発行・編集／福岡県河川協会
〈福岡県県土整備部河川課内〉
〒812-8577
福岡市博多区東公園7-7
TEL：092-633-2826(直通)
FAX：092-643-3669
企画／株式会社インテックス福岡